
探して探して雪の中

空空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探して探して雪の中

【Nコード】

N64810

【作者名】

空空

【あらすじ】

ある日少年は旅に出た。

住み慣れた家を飛び出して、雪の降る街へと。

これは小さな少年の小さな物語。

(前書き)

童話らしい。童話書いてみた。

窓の外では、きらきらと雪が降っていた。
だから僕は、その日家を出た。

＊

小さな家を飛び出して、両手を広げて上を向く。真っ暗な空から
白い雪が生まれてくる。

うん、なんだか寒くもないや。

小さな赤い屋根を見る。

ここには僕しか住んでいないから、これで家は空っぽだ。

だけど鍵は閉めない。

とられるものなんて、椅子とテーブルと、それから幾つかの食器
だけだ。

もうパンの一欠けらだって家には残っちゃいないんだから。

そういえばだいぶご飯を食べていなかったし、さっきまでお腹が
ぐーぐー鳴って死にそうだったのに、今は不思議とお腹がすいてい
ないな。

くずれたレンガの上にはおいしそうな雪がつもってる。

あれはふわふわのクリームで、こげ茶のレンガはちよつとかたい
スポンジ。そんなことを考えてみる。

うん、とってもおいしそうだ。

だから僕は、外に出ようと思ったのかな？
分らない。

まあいいや。

チェックの帽子と、少し汚れた白いシャツ。厚手のズボンと、そ
れから忘れちゃいけないのが、お父さんの作ってくれた、妹とおそ

ろいのサスペンダー。

とにかくお気に入りのものはみんなみんな持ったから、例えば泥棒に入られたって、きっとその泥棒はすぐに家を出てしまうだろう。

道の向こうではきちんと街灯が灯っていて、夜だというのに暗くない。星はないけれど、あちこちでたくさん窓から光りがもれている。たぶん、あの家でもあの家でも、きっとお父さんとお母さんと、それから子供たちが、おいしいコーンのスープを飲んでいるに違いないんだ。

いいなあ。

ちよっただけ寂しくなった。

石のタイルにはいろんな色がある。茶色や灰色、黒やこげ茶、赤っぽいのに白。

一番少ないのは白色だ。よし、吐息を整えて、そっと白いタイルを踏む。

その上だけを通るように、ぼろぼろの靴を動かしていく。

はみ出たら負け。

負けたらどうしようか？

よし、もしもはみ出たらそこから三十秒動いちゃいけないことにしよう。

用心深く、一步一步進んでいく。

下を向いたまま、遠くのタイルへジャンプ。少しよろけて、あわてて両手を広げる。技を決めた選手になった気がして、少しだけいい気持ち。だけどあんまり下ばかり向いていたから、僕はその時驚いて転んでしまった。

すぐそばで、犬が大きく吠えたのだ。

「こら、どうしたの？いきなり吠えたりして」

すぐに飼い主がいさめてくれるけど、犬はこっちを向いたまま、低く唸って睨んでくる。

白い牙は、噛まれたら痛そうだ。

「ほらいくわよ」

だけど飼い主の女の人が強引に連れて行ってくれる。名残惜しうにこちらへ唸る犬が、首を捻ったままの飼い主に連れていかれる。角を曲がって、僕はようやく安心できた。

あ、

足下には、赤と茶色のタイル。

まったく、これで三十秒動けなくなっちゃったじゃないか。

文句を言ってもイヌはもういない。心の中で、一から順に数え始める。誰も聞いちゃいないから、すこしだけ早口にしてしまおう。

「にゃあ」

あ、猫だ。

にゃあとまねをしたら、あっちもにゃあと鳴き返してきた。

にゃにゃあ、にゃ

「にゃー」

にゃにゃにゃにゃにゃ

「うーにゃあ」

にゃん

「にゃん」

よし、三十秒たったぞ。

腰を上げると、ズボンが少し湿っぽかった。

そこで僕はすぐそばに見慣れた顔があるのに気がついた。

うわ、肉屋のベニーだ。

いっつも体の小さい僕のことをいじめてくる。最近はやったのになか

いたのにな……
多分、僕がねこの鳴きまねしてたのを見て、からかってくるに違いない。

ダメと思ったけど、すぐそばの家の塀に隠れる。

見つかったら、思いっきりバカと言って逃げてやろう。

そう心に決めると、なんだか胸がどきどきしてきた。

よし、来い。

.....あれ？

ベニーは猫に視線を向けると、わっと大きな声で脅かしてから、ボクの隠れている塀の前を通り過ぎて行ってしまった。

なあんだ、見つかつてなかったか。残念。だけどちょっと安心。よし、今度は赤タイルを踏んでいこう、っと。

きらきらと、夜のはずなのにあっちこちの店が開いていた。そういえば、今日はカミエニの日だっけ？

この日は店を閉めないで、夜の間もずっと灯りをつけておくんだ。そうしないと、抜き足差し足こっそりと、いたずら妖精がやってきてお店の品物を落書きしたり壊したりするんだ……って、お父さんが言ってたなあ。

昔からそういう風に決まってるんだ、って。

まあ、いいや。店の灯りに、雪がきらきらと光ってとってもきれいだから。

そんなお店の通りを赤いタイルだけ踏むように跳ねていると、なんだか舞台にでも上がったみたいだ。

いい気分で歩いていると、「ねえ」と声をかけられた。

「こんな時間にどうしたんだい？」

しわがれた声、ぼろぼろの服。寒くないのかな？ 寒いだろうな。変なおじさんは、僕を見てから少し笑った。

「とは言っても、私たちには時間なんて関係ないか」

なんだろう。通りに人は多いのに、このおじさんはやっぱり浮いてるなあ。変なおじさんだ。道行くみんなも声もかけないし目も向けない。

もしかしたら、このおじさん、幽霊かもしれないぞ。そうだ、そうに違いない。

——おじさん、幽霊でしょ。

おじさんは目を丸くすると、薄く笑った。

「はは、ばれてしまったか」

やっぱりそうだ。だけど幽霊ならきつと寒くないな。お腹も減らないに違いない。

「それで……君はこんな時間にどうしたんだい？」

そう聞かれて、首をひねる。

どうして僕は家を出たんだっけ？

たしか窓の外で雪が降ってて、それで……

——探し、もの？

うん、そうかもしれない。

そうだ、僕は探しものに来たんだ。

ずっと失くしてたもの。ずっと欲しかったもの。それから、白い雪みたいになふわふわの、あまいケーキを探しに来たんだ。お母さんが作ってくれた、あのケーキ。

「そうか、探しものか……」

——うん。僕は、お母さんとお父さん、それからナナを探すんだ。

「……その人達は、どうしたの？」

——みんな、帰って来ないんだ。

そう、みんな帰って来ないんだ。

せっかくの誕生日だったのに、僕は風邪で寝込んで、それでお父さんとお母さん、それからナナも、僕を残して隣町のお医者さんの所へ行っただ。僕は少しの風邪だったから。ナナはひどい風邪だったから。

帰ってきたら、ケーキを焼いてあげるから、そう言って、頭を撫でたお母さんは扉を閉めたんだ。

だけどみんなは帰ってこなかった。

僕の風邪はすぐに良くなったけど、お父さんもお母さんも。それからナナも。

ずっと帰ってこなくて、お父さんの洋服屋さんはつぶれちゃって。怖い叔父さん達が、家のものをみんな持って行って、僕はずっと家

の奥の地下の倉庫で震えてた。

音が止んで、外に出たら、もう家の中には何もなかった。
あったのは、椅子とテーブル。

後は、お父さんが作ってくれた、このサスペンダー。

妹とおそろいの、このサスペンダーだけ。

だから僕は、みんなを探しに行くんだ。

おじさんは、悲しそうな顔をして、それから大きく息をついた。

おじさんは笑ったけど、なんだか笑ってないみたいだった。

「それじゃ、頑張ってるね」

おじさんが手を振ってきたので、僕も手を振る。

雪が少し強くなってきた。

変なおじさんは、いいおじさんだったのかもしれない。

あ、

下を見て気付く。

もう一度三十秒。

今度は灰色のタイルを踏んでいこう、と思ったけれど、もう雪が積もってきてよくわからないや。

これはお終い。

楽しかったから、今度ナナも誘ってあげよう。

てくてくてくてく、大通りから外れて歩いて行く。

それでもまばらにある店には、まだまだ明かりがとまっている。みんな妖精にいたずらされるのが嫌なのかな。でも、一回くらいはあってみたいな、妖精。

いたずら好きなら気が合うかもしれない。

進んでいくと、小さな洋服屋さん。

すこしお父さんのことを思い出す。

肩からピンとズボンを吊ったゴムの紐を、ぎゅっと握りしめる。

なんだか目からこぼれそうだったので、ぎゅっと目をつぶる。

お父さん、お母さん……ナナ……

ふわっと、頭がなでられた様な気がした。

目を開ける。顔を上げる。そして目を擦った。

通りの外れの小さな洋服屋さん。

灯りのついたショーウィンドウ。

その向こうで、ナナが笑ってた。

小さな手を振っていた。

窓に映る、小さな女の子。短い髪に、かわいい髪どめ。それに、それに、スカートを吊ってるサスペンダーは、僕とおそろいの、お父さんの。

窓に映ってるのは、僕じゃない。

ナナはにっこり笑って手招きしている。

風邪はもう良くなったのかな。顔はもう赤くないや。

お父さんは？ お母さんは？ そう尋ねたら、ナナはたたとかけて、なにかにしがみついた。

お父さんがいた。お母さんがいた。

こちらに気付いたお母さんが、微笑みかけてくれる。

ひげの伸びたお父さんが、ナナを抱え上げている。

見なかった。

見つけたよ。

みんなお帰りなさい。

泣きたいけど、泣いたらお父さんに笑われる。

お帰りなさい。お帰りなさい。お帰りなさい。

震えた声でそう言くと、やっぱりお父さんが笑った。

お母さんが奥から、真っ白な、ふわふわの雪みたいなケーキを持ってくる。

ろうそくが、一、二、三、四、五、六、七……

早く食べたいとせがむナナに、お父さんが頬ずりをする。

ひげがくすぐったくて、ナナがキャッキヤと声を上げる。

みんなが、手招きしてくれる。

僕もガラスの向こう側へ。

手を伸ばすと、思ったよりも簡単に、中に入ることができた。

ろうそくに火がともる。

歌を歌って、みんなが声をそろえた。

誕生日おめでとう。

そして、

ただいま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6481o/>

探して探して雪の中

2010年11月1日23時22分発行